

1977_01

①

煙とも何ともつかぬ青い気体が山合いを覆っていた。じつりと冷たい。四月に入ったばかりだった。その半透明の青さを通して、石炭は危なっかしく頭上に置いている断崖が私達の正面に、まるで無言の吐息を放っている巨人の口腔のような形できり立っていた。下唇部に相当するヶ所を、日の出前の光源のはっきりしない空をおぼつかなく反映させながら、静かな線を引いている。

-あれを登って行くのだろうか？

と私は側らのジョンに云った。

-ああ。

とも、ううともとれる音声が、鼻のつけ根まで引き揚げたフィッシャーマン・セーターのトックリ襟の中でした。上半部だけが出ているジョンの顔はその高くつき出た鼻を、金髪まじりの太い、毛の長い眉の下の終始何者かを凝視しているかのような巨大な眼のせいで、通常彼につきまどっている印象を増々強めていた。

-ハンニバルのアルプス越えだ。

と彼は睡眠の気だるさがまだ染みついている鈍い声だった。

-ハンニバルかい・・・？僕はたったいま、餌をあさっている鷹を思い浮かべていたところだ。

-あと一、二時間？僕はまたてつきり半日はかかると思っていたよ。じゃあ、昨夜のうちに漕ぎつけたらに・・・。最低十五ドルはまるまる無駄にしたわけだ。

-あ、あ、あ、

と低く云いながら、ジョンは片手を上げて状況を意味するゼスチェアをした。

1977_02

②

-それにはそれなりの理由がある。

-まさか、ハンニバル氏、真夜中のアルプス越えに腰を抜かしたわけでもあるまい。

私にはまだ、一言云いたい気分がむづかっていた。やっどこさかき集めた千ドルそこそこで、これからこの見も知らぬノースカロライナ州中の山麓で最低一年は生活しようと目論んでいる私にとっては、十五ドルといえば総予算の一・五パーセント、つまり、薬代に当てようと考えているパーセンテージに相当する。これは健康状態、最好調と仮定した上でのことだ。萬が一、ひどい疫病にでもかかるとか或いは断崖からころげ落ちて脚の骨を折るとか、ということにでもなったら、全計画は完全挫折の浮き目を見ざるを得ない。こう見渡した限りでは大変な疎開地域のように思われる。想像していた以上だ。

1977_03

③

私は昨日、州道を走っている車の中から谷合いにかけて見落ろした惨胆たる人家の残骸を思い起こしていた。それは異様に無様な、丁度無思慮に放たれた死体が描き出したかのような奇怪な形骸だった。トタン、枕、板切れ、硝子等の人間の巢のための代物が元々そこに掻き集められた当初の目的から完全に忘れ去られてしまった白色の斑点をまぜた暗褐色の、グロ

エースクな集塊物、萬端尽きたという格好で、だらしなく谷肌にへばりついている。まるで、大地すらもその同化作用を冷酷に拒んでいるために、年々無意味な醜化を重ねて来たかのようだった。然も、その醜化現象にすらすでに底知れない冷たい疲労感がある。

—あれにも人間が棲んでいるのかい？

私は、いささかうら寒い思いで、隣で片手をハンドルにかけて運転しているジョンにたずねたものだった。

—多分ね。田舎の貧民層だ。

—ああ、或る種の建築物は、決して綺麗に死化する

1977_04

④

ってことが出来ないんだな！建築材料のせいだろう。たとえば同じ廃墟でもローマを見てみる。あれは石材などの自然物を使っているからだよ。全く、優雅なものだ・・・。

然し、いよいよあと一、二時間で、今後一年の生活の場へ行き着くという実感の前では、石材の優雅な印象は至って影が濃かった。田舎の貧民層は、どうやら、目的地へ接近するにつれて、その数を増して来るように思われる。こんな場所で大病にでも見舞われたら、それこそ命取りになるかもしれない。生命がひるみを見せた途端に物体はあの人家のように不様に衰えて行くのに相違ない。そして、最終的には、おそろしく無意味な醜悪なかさぶたのような存在物となり想像を絶するような死醜と化す破目となるのだ。私は、ぞっとして、思わず声を発して身震いをした。

—寒いな—。

ジョンが妙に感じるといけない、という配慮が、そんな言葉を形取った。実際、四月とは云え暁前は寒かった。

—車に入ろう。すぐに暖まる。

とジョンが云った。私の懸念には全く無頓着だといった相貌だった。

—いよいよ幕開けとなると、少々怖気がついて来るな。

私は巨人に向って進行している車の中で、半端

1977_05

5

自分自身に対してあとの半分はジョンの反応をためすために云った。

—ステージ・フライトの一種だろう。

ジョンは、横目でちらりと私の方を見た。眼尻に微笑らしいものが浮かんだが、別段、手がかりになるような反応はするような気配でもなかった。

—総人口はどのくらいだい？

—合計十四・五人かな。

—十四・五人？まさか・・・

—「山（マウンテン）」のことを云ってるのさ。僕の親父の家と、叔父の家と、叔母の家と、それから・・・

—待てよ。それはもう聞いている。君の親族が住んで住んでいる「山」のことはね。僕が云っているのは、その「山」の麓で繁栄しているあのV村のことだ。どのくらいの規模なんだい？映画館とか図書館とか、・・・それから病院なんぞという文明へのヘソの尾も結構あるんだらう。

-然し、君はそうしたもののから脱出する予定なんだろう？

-そりゃそうさ。然し・・・・

私は車の屋根に殆ど覆いかぶさるようにのめり出ている絶壁を眺めた。沈黙の叫声ほど内臓をつんざくものはない。こちらの内臓を裂け裂けにして置きながら、叫声を発しているもの自体は、あくまで遠く、隔離している。こちらの存在を抱擁してくるものは皆無だ。

-そう心配するな。「山」の人間達はちゃんと生きている。もっとも日本人は生命存続のために、何か特別な装置でも必要とするというのなら別の話だが。

1977_06

-そんなものもあるにはあったが、僕はとうの昔に廃用したんだ。退化をぶら下げて歩けるほどの贅沢暮らしはしていないせいでね。それとも沈没しかける船が荷物を海岸に放り投げているといったあたりなのかもしれない。

-それほど難行しているわけでもあるまい。

-僕なりの水準でかなり難行中だよ。

ジョンは暫く無言で今度は下り坂になった山道の急カーブに神経を集中している様子だったが。

-どうしても絵を描かなければならないというわけかい？

とぽつりと云った。

-失敬な質問だな。然し、確かに真をついているよ。僕自身、何度この質問をくり返したか知れやしない。ああ、全くのところ、選択の余地を許さぬ天命だと思い込めたらどれほど幸運なことか！描いても良いし、描かなくても良いし・・・・。ハムレットが生きてても良いし、生きなくても良いしと、だらしなく問い合っているような具合だ。君・・・・。生死にかかわる綺麗さっぱりとした二者選択。つまり、描くか描かぬか・・・・有か無か・・・・。世の中には選択の余地が在りすぎるよ。

-そこで、手頃な消却法を採用したというわけかい？放り投げ得るだけを投げ切った後に、残存したものは、それが何であっても構わない。

-そうだな。勿もそうと明瞭に意識してやっているつもりではないが・・・・

1977_07

7

大体のところでは必要に迫られて行動しているわけだよ。

-ふむ。僕は君のこの旅のことを念頭に置いているんだが・・・・。

-というと？

-つまり、君がここへ来たがった理由は文明社会内で実現可能な限りで、然も客観的にみてもいくらかは尊敬に値する限界内で慎らくは、最大限の窮境状態に身を置くことに依って、その描くか描かぬかという質問を試みたいからだ、とも考えられるからさ。

-そうであってくれれば望ましいね。然し、君にそう云われるまでは、僕は自分の頭の中でそんなことを考えてはいなかったね。率直に云うと、君のノースカロライナ談を聞いているうちに、ただ妙に好奇心のようなものに馴らただけだ。有難かったね。お陰で抜け出すための気分的な態勢が出来たよ。丁度、しーんとした部屋の中で退屈し切っている時に、ドアの外で何かコトコトと音がしたようなものだ。仮りにそれが小ねずみ一匹かもしれぬと思っても、矢張り立ち上ってドアを開けてみる気持になる。一たん開けてしまうと、その音自体が何であってもそこには別世界が待っているんだ。仮りにその世界が単なる「部屋の外」で

あるに過ぎなくても変化は変化だからね。

-日本を出た時もそんな心境だったのかい？

-まあね。大体そんなあたりだ。日本脱出ぎりぎりの時にそもそものきっかけを作ってくれたある人間が真顔でこう云ってくれたね。つまり、「そこへ行く」ということが肝用だ。

「ここから出る」というのではなく、「そこへ行く」ということが、とね。奴さん、君同様、アメリカ人だったよ。デイヴという名の

1977_08

8

のっぽのユダヤ人だった。糞真面目な善人で、奴の顔を見るたびに「善人であるということは悪徳だ」というニーチェの言葉を思い出したものだ。そのせいでもないが、こちらには彼の忠言の散々を馬耳東風に付す傾向があった。せいぜいのところ、英語の格言でも覚えるつもりで拝聴していたね。

-ここから出るのではなくてそこへ行く・・・か。

ジョンが妙に静かな口調でデイヴの言葉を繰り返した。

②

ノースカロライナで約一年間ほど実験的な生活をするつもりだと、まだ日本に住みついているデイヴに書き送ってから数週間になる。彼からの返事は惧らく「山」のジョンの両親のところへ届くに相違ない。もともと私の渡来のきっかけはデイヴと知り合ったことに発端している。当時-かれこれ二年近くになる-私達画学生が入りびたっていた「コンチェルト」という名の吉祥寺駅前の喫茶店に、二、三日おきに、一人でのっそりとやって来る外人が居た。「コンチェルト」とは、無論のこと、音楽用語のコンチェルトで、珈琲が安いことと、セルフサービスで自分の好みのクラシックを聴けるということ以外には、人間の興楽に享し得る

1977_09

に足るものはからきし無い至極お粗末な場所だったから、同じ学生仲間でもそこには財布の中身に苦勞をしている者の方が多く集まっていた。だから、金まわりが良いという定評のある外国人がやって来るといようなことはかなり意想外だった。

-若しかするとどこかの貧乏国から来ているのだろう。

と、私達は顔色浅黒く、長髪、眼玉も黒々としたデイヴを盗み見しながらひそひそしたものだ。

-インド人かもしれない。

-いや、多分アラビア人か、イスラエル人だよ。セム・ハム族は色黒だという話だ。

-然し、クラシックを好むほどのアラビア人に金が無いということもないだろう。

-いかもの食いということもある。

-後進国の成金にはいかもの食いは少ないぜ。奴等は見栄を張るのに余念がない。

という具合で、デイヴの神秘的な無言の存在が、徐々にその喫茶店の壁内の他の存在物と同化して見えざる対象と化すまでには、ほぼ一、二ヶ月はかかった。私達が殆んど彼の姿に気がつかないで座っていたある日のこと。

-ダレカ、ワタシヲ、タスケテクダサイマスカ？

と云っている鼻にかかった声が私達の背後でした。

-え？ホワット？

と隣席の私の友人が振り返ると外国人は瞬間、とまどっていたが

-クッド・ユー・ヘルプ・ミー・プリーズ？

と一語々々切りながら英語で云った。

1977_10

-イエス、イエス。

と私の友人は意気込んでしきりと首を振りながら返答した。実のところ内心、その外国人が遂にこちらに向って話しかけて来たことが嬉しかったのだ。彼の存在が透明化したとは云え、私達の意識から消滅してしまったわけではない。デイヴがただのそりと座っているだけでなかったら、私達はその一挙一動を見漏らさずに観察していたに相違なかった。

-ウッド・ユー・プリーズ・テール・ミー・ハウ・キャン・アイ・プレイ・マイ・ミュージック？

-ユア・ミュージック？

-イエス・マイ・ミュージック。

-アー・ユー・ア・コンポーザー？アン・アーティスト？

-オー・ノウ・ノウ・ノウ！

-イット・スイムズ・ライク・エヴリ・パディ・イズ・プレイイング・ヒズ・オウン・ミュージック・
.....

と云って、彼はレコードが詰っている棚を指差した。友人はすっかり困り切って

-おい、意地が悪いぜ。相手しろよ。

と私に向って早口に唇を動かさずに云った。私がミッション・スクール出だということは連中に知れ渡っていた。デイヴが数週間の長い沈黙の後で、その日突然聴きたくなったのはアイヴスのセントラル・パーク交響曲だった。

-年中、ラフマニノフにベートウヴェンで頭に来てしまったんですよ。

と云ったが、残念ながらアイヴスのものは無かった。

1977_11

-多分、ホーム・シック気味なんでしょう。

-御故郷はアメリカですか？

-そう、ニューヨーク市のブルックリン。セントラル・パークへはよく出かけました。

浮世絵の勉強をしに、わざわざやって来てから約一年近くになるという話だった。上野の芸大の助教授をしている英語の達者な人物から手ほどきを受けながら、一人で、吉祥寺の安アパートに住んでいるのだそう。

-現在、アメリカでの東洋ブームは大したものですよ。僕などはまだ序の口の方ですが、そのうちにきっと東洋芸術を勉強しにどっと押し寄せて来ますよ。日本の映画技術は素晴らしい。

と、ひどく感激していた。それ以後は、デイヴはすっぽりと私達の仲間の一人に収まってしまった。武蔵野美校の卒業式には、かしこまった顔をして、参列した。

-これからどうするつもりだい？

式の直後に、私の部屋の畳の上であぐらをかきながらデイヴが云った。

-多分教師にでもなるさ。絵を売って喰って行ける可能性はゼロだ。若しかすると絵は止めてしまうかもしれないな。少なくともここ当分は.....

-勿体ない。せつかくの才能を無駄にしてしまう。

-才能？そんなものが役に立つような世の中ではない。すべては宣伝効果がものを云う時代だ。

-例えばオカダのユーゲニズムとか？

-例えば某のチンドンイズムとか.....

某というのは当時の東京画壇おかかえの流行児だった。

1977_12

12

その男に就いてはその飛び切り高価な珍品炸裂に当って、流行児たる面目を徹底的に全うする心算あつてか、当時、矢張り巷を歩いていた流行歌で、チンドン屋が殊更に好いていたメロディーを、アトリエ一杯にハイ・ファイで流すという話が伝わっていた。チンドンイズムとは私達画学生仲間がそこから誘出した名

前だった。

-しかし、優秀な技術というものはそれ自体が独特の天の才分だと思わないかね？と、私の写実技量のほどをかねてから気前よく買いかぶっていたデイヴが云った。例えば、ピアニストだ。技術的な素質が備わっていなかったら、いくら創造性に優れていたところでグウの音も出ないだろう。

-技術的な才能なんぞ、練磨次第で誰にでも獲得出来る代物だ。

-そうかなあ・・・。

と彼は一寸考え込んでいたが、

-例えば、僕の場合だ。僕はピアニストになりたかったんだ。今でもなれたらなりたいとさえ思っている。子供の時に妹と一緒に習いに行った。丸々と肥えたユダヤ人のおかみさんの所へね。ところが、妹は伸びたが、僕は一定の段階で止まってしまったんだ。すっかり進行停止というわけではないが進度が遅れる一方だ。その上、どうしても微妙なタイミングを捕えることが出来ない。若しも、完全なピアノ弾きが技術的な練磨だけで到達出来るものだとしたなら、時間さえかければ、僕もホロヴィッツにはなれるという算用になるだろう？ところが僕は、下手糞なルビンシュタインで止まってしまった。・・・技術とい

13

うものは決してそんな機械的なものではないよ。意欲心という内部衝動と適性という天性との

結合だ、と僕は思うね。単なる技術屋と俗に言われている存在の背後には、思いも寄らない複

雑な要素が働いていると思うよ。

-多分、僕の場合は下手糞なホロヴィッツなんだろうな。三文の足しにもならない。

-それは不当だな。過度の自己卑下は過度の自己満足同様に危険だ、という話だ。僕から見る

と-少くとも僕も画学生の一人だということを忘れないでくれ給え

-君には確かに才能がある。正直なところ、僕は感謝しているくらいだ。君ほど上手く描ける

奴に現実にはまだお目にかかったためしは無いよ。上野にも居ない。

-僕の教授に言わせると、僕の上手さは技術的なデカダンスだっていう話だぜ。

-それは君の内部が方向を持っていないからだよ。単位稼ぎ上、ふざけ半分にデッサンをした

り裸婦を塗りたくったりしているからさ。デカダンスになるのが当然だ。

-特別なものにも欠けているということだ。勿も僕に言わせれば、一切合切特別であらねばな

らぬという理由もないけどね。世界平和を現実しようというのが人類福祉の理想だとしたら、人生中に潜んでいる特別さへの衝動は出来るだけ消却してしまった方がいい。未来人というの

は多分、そんな感覚がまるで無い人間に相違ない。さもなければ未来という時点には人間なん

ぞは存在していないかもしれないのだからね。それとも、ハーバート・リード流に、芸術行為を人間の悪魔的衝動を拭い流すための

14

下水道にするという手口もある。そうなると、特別さなんぞという代物は、糞尿ほどの価値し

かなくなってしまうのさ。多分、僕は目下のところ芸術的便秘症状を起こしているんだ。デイ

ヴは手のほどこしようがないといった顔付で首を横に振っていた。

挿入 (Insert)

(delete from here)

それから二週間ほど経ったある日の朝早く三月の空気の中に白い息をハアハアと吐きながら彼

が私の部屋に飛び込んできた。

—一体全体、どういうわけで、日本人には電話をつけるという習慣が無いのかね!

—大声で叫べば向こう三軒両隣にまで通じるという地理的利点があるからさ。

—ともかく聴いてくれ。ここ数日、ニューヨークの奴らと連絡を取って居たんだ。おくろの知

り合いの未亡人で金の使い道に困っているという贅沢な持病のある年増女がいてね。彼女がた

またま視覚芸術のパトロンと来ている。君のことを話したら、向こうの旅費持ちで訪問しない

か、という話だ。最低六ヶ月間。ニューヨーク郊外ロングアイランドの高級住宅地帯だ。どう

だい? 嫌とは云わせないぜ。僕の方から先まわりしてオー・ケーしておいた。僕は日本人の義理とか恩とかという感覚を一応承しているから。条件として、一日一回の犬の散歩を提供して

置いたよ。

(until here)

15

挿入(Insert)

—それで教員になってどうするんだい? 君のその心境では技術伝達に腰を入れる様子でもない

し、最近の学校教育はそれを要請しているわけでもないのだろう? リード式下水道工事に精を

出すつもりかい?

—そうさ。暗がりで糞尿仕事をやるのさ。面白いね。人間の体温がまだ残っているこってりと

した創造的糞尿だ。大体のところ、女が作り出す子供というのを別とすると、世俗的な下心無

しに、純粹に個体から出てくるものといえば排泄物くらいなものだろう。以前、僕は、所せん

男が創造し得るものといえば毛髪しかないのだという考えにとり憑かれたことがある。純粹な

独創という観念をやたらとふりまわす癖のある若い教授が居てね。僕は、ある日、僕が創造し

た毛髪を、—体毛までひっくるめてね—切り取ってその切り取った日付順にそれをごていねいに

キャンヴァスに貼りつけて教室へ持って行ったことがあるよ。文字通り、ヒゲの御帰還だ。
奴
さん：僕にアゲ足を取られたと勘違いして、大変な御不満だったね。結局のところは、奴が考
えている純粹さというのは、純粹さだと予め設定されたワク内での純粹さという意味だったの
さ。アナリストの天使の顔を純粹さの表現だと思っていた奴等と大差ない。天使のような無心
な欲とか色とかってことなんだろう。そんなわけなら、絵の具作り精進していた方がいい。
そ
の上元々僕は俗に云う創造性というものに対しては猜疑心を持っているんだ。特に最近のよう
に「自由」の御題名の元で野放しになっている人間の創造性はね。フィディアスからミケラン
ジェロを通してセザンヌに至るまで、一見、創造的進化とも見える一種の飛躍は、
16
もとを正せば俗的見解からの心理の方向に向かってなされたのみの飛躍だったにすぎないよ、
君。一匹が飛躍すると、我も我もと飛躍し始める。そのうちに最初の飛躍の意味なんぞ、誰も
問題にしなくなる。肝心なことはとにもかくも飛躍するってことになってしまうんだ。そう
な
ると、今度は、飛躍の仕方を緻に入り細に入り拾得し始める。その拾得自体が創造活動だとい
うことになる。そのうちにそこから法則が出て来る。権威が出て来る。俗的見解ががちり
と
足枷を作る。そこで又、のみの飛躍現象が起こる。若しも君、こののみの飛躍し続ければ、何
時かは心理なり何なりに到着できると考えて、人史の脈絡の暖かみなんぞを予想したら大間
違
いなさ。芸術との相違はそこにあるんだ。つまり、芸術行為に関する限りでは積極的な進行
なんぞあり得ない。ミケランジェロが到達した地点から更に進行を続けることができる者はミ
ケランジェロ以外にはあり得ない。ところが如何に天才とはいえ、そこには個体的存在として
の制限がある。一定の期間が過ぎると個体は消滅せざるを得ないんだ。だからミケランジェ
ロ
の次に出てきたのみはこの個体に帰った出発点から自分自己の飛躍をする以外には方法がない
。ミケランジェロが到達した点まで飛躍する場合もあるし、それ以上にやれる可能性もある。
しかし、こののみは決してミケランジェロの延長点ではない。そして上手く行って六、七十年
も経つと蚤は死んでしまう。一切が個体に還える。又何処かで蚤が生まれる。一粒の蚤が地

に

落ちたところでそこから出て来るものは矢張り蚤でしかないってことさ。キリストの話で君に

は悪いけどね。

—仮りにそうだとしたところで—勿も僕は君の考えには賛同しているわけではないがね—芸術行

為を通して、天才が、真理を啓示し得るという前提だけでも希望に

17

価するのではないかね。天才的蚤の出現のためには、矢張り天才で出来た蚤畑が必要だよ。

歩

兵軍勢が無かったらナポレオンだって居なかった筈だ。

—その歩兵軍勢がそうと意識し始めるとどうなる？ ナポレオンの居場所がなくなる。創造性の

鼓吹は軍勢解体にとってもって来いの代物だ。ナポレオンでもミケランジェロでも、便所では

こちらと同様のものを排泄したという可能性があるのだからね。

—然し、創造的表現と自動的表現は同一物ではないだろう。

—どこが違うんだい？ 前者は人間を独立した創造的存在だと仮定した上での発想で、後者はそ

の同じ人間存在を社会的活動の産物だと仮定した場所で同じことを云おうとしているだけのこ

とだと思っね。だから同様な現象に対してこの両方が当て嵌まるということが起こり得るのさ

。勿も、画商が売り込みを念頭に置いている場合には「創造的」なほうが優勢になって来るけ

どね。塀に引っかけた小便の痕跡などには、何かドエライ名称でもふっかけぬ限りではわざわざ

ぎ金を出す物好きはまだいないだろうからね。私は最近、名だたる画廊で美々として壁に納ま

っていたサム・フランシスのことを念頭に置いていた。

—太平洋派だ。必ず一見して置くべきだ。芸術の新水平線が見えるだろう！

と、勢々堂々とかわい顔をして教授が云ったものだった。

—ふむ、新水平線から雨漏りがして来たかな。

腕組みをしてその大画面の正面に足を踏まえた友人の一人が云った。

18

—ジャクソン・ポロックは、バケツのケツに穴を開けてそこから下痢の如くに色をたらすという話だ。

—色は匂へど、散りぬるを…か。勿体無い話だ。草壁をもうけさせるだけだ。

—多分、顔料屋から金でも貰っているのだろう。私達は、側らでおそるおそる傍聴している紳

士姿を意識しながら。特有のひそかな屈曲した快感を味わっていたものだ。

—これで奴らを好む者が増えて来たら商品さばきにはもって来いだな。この推論を押しで行

く

と、こいつよりはポロックのほうが俗崇拝を集める可能性が大きいということになるぜ。何せ

、奴のほうが数十倍は顔料を消費しているからな。

—それにしてもアメちゃん好みにバカデカイ。いかにも上野から来たらしい若い男が居て、

憎

悪に燃えた眼付でこちらを睨んでいた。背中に旗標でも立てているといった様相だ。西郷隆盛

の像が上野に立っているというのは皮肉なことだ！私は別として、上野を落ちてやってきた連

中の多い武蔵野には、野党精神に迎合する気風が自ずとあった。その対象は何であっても構わ

ない。当時の美術評論家を画商に組むものは大体のところ一切合切、私達の見解からすれば完

がんの一族に属していた。

—ミッション出のお坊っちゃまか。煮ても焼いても食えない西洋者の一種だな。

19

という具合で、入学当初は蛮風威々しい連中からは白視されたものだった。別段、クリーム色

の雰囲気こそそのかされてミッション・スクールを選んだわけではなかった。勿論、信仰心のせいではない。要するにガリガリと勉強をするという状態がピンと来なかったのだ。私の父の

影響が少なからずあった。父の友人にスミスという神父がいたことも無視できない。北海道の

南にある山麓で教師をしていた。私の父には戦時中の西欧思想叫弾を、大正リベラリズムでひ

っそりと胸中に纏いかくしながらろうじてくぐり抜けて来たという歴史がある。だから戦後

は正に春来を待っての開花期だった。若手新進校長となって赴任した山中を風薫る白樺の高原

と呼び、そこに家のサンマー・ヒルを展開したわけだった。

①外ならぬ、この所が先ず第一の彼の教育対象だった。その上、それ以前から、長男の私は、田中ビネ式と、ピアジェから始まって諸々の西欧育的新メソッドの実験台となっていた。

—この子は、視覚的能力が異常に発達している。絵描きにさせよう。

とある日父は母に云ったのかもしれない。

ともかく、物心がついた頃には、私はラファエルのマドンナを一生懸命に模写していたという

話だった。私自身の記憶の中には父と一緒に印象派の複製を眺めていたという光景が鮮明だっ

た。終戦前だった。どこかの隠れ場所から珍しく家に帰って来て私の傍に座っていた父の手中

にある暗緑色のかたい表紙の本を私はスパイ用の秘密書類に相違ない、と思って、胸をとき

め

かせながら凝視していたことが生々しく思い出される。

20

その頃、国民学校の鼻たれ小僧共が私を特殊扱いにしていることは明らかだった。それが、ど

うやら父のせいであるらしいと私は感じていた。あるいは父は国賊なのかも知れぬとも考えら

れるふしがあった。敵国に通じているスパイなのかもしれなかった。現に、スパイ、スパイ、スパイの子! と云って、石などを投げつけてくるようなひどい奴等だっ居た。母は勿論否定

した。

-先生、私の父はスパイなのですか?

と、放課後一人で教室に残っていた教師に訊いたことがある。

-スパイだったらお父さんはお家へ帰って来たりすることが出来ないでしょう?

と、その女の教員は優しい顔付をして、じっと私の眼を見つめた。

-じゃあ、どうして皆はスパイだと云うのですか?

-よく解らないからでしょう、きっと。

-押入れに電線装置をつけて、秘密事項をこっそり発信しているという奴もいます。そんな

のは嘘です。押入れを全部探してみたけど、そんなものはありませんでした。ただ、空襲の時に

敵機のありかを聴くために、ラジオを置いてあるだけです。空襲の時には、母と一緒に押入れ

に入るのです。

-先生も押入れで、ラジオを聞きますよ。

と笑いながら女教師は云った。

-でも先生はスパイではありません。あの子たちは自分でよくものを考えるということがまだ

できないのでしょうか、きっと。

-先生は奴らに自分で考えることを教えてやる事が出来ないのですか?

-奴らなどと云ってははいけません。……考えることを教えるというのは……

と彼女はとまどっていた。

21

-私にはまだ出来ないのかもしれない……。

-まだ?

彼女は困ったような顔をして一寸微笑した。そして、

-もう少しのしんぼうですよ。

と妙なことを云った。東京から疎開してやって来た教師の一人だった。それから一年ほどして

終戦になった。私は国民学校四年生だった。矢張り、「もう少しのしんぼう」だったのだ。現

在彼女は何処に居るのか知らないが、神の祝福こそあれ! と、私は今でも神妙にそう思う。

ともかく、私は窓からの直射光線を受けているせいで、空中を舞う細かい埃が微妙にもつれて
いるその濃緑色の本の表紙から眼を放さなかった。それまで家の中では見かけたことがない
本
だった。父の白い指がさっとその本を開いた。私は息を凝らしたままじっと身動きもしなかつ
た。-どうしよう。僕も共犯者になる! という声が心中を走った。
-こっちへおいで。

と父は云ったのだと思う。私はいつの間にか、父の膝にもたれていた。眼前には、銀色の肥
え
た女の怪人が裸でゴロリとしている図があった。
-ピカソだよ。

という声が聴こえた。

-ピカソ?

-ピカソ…。

元気そうにきょとんと丸い眼を見開いている怪物に相応な名前だと思った。それがフランス
の
絵描きの名であることは、後で、その本を読んでいるときに明解した。それから数日後、家
へ

帰って来た父は

-どう思うかね?

とその本に就いての私の意見を求めた。

22

-ピカソは何とも思わない。外と同じにみえるよ。でも、僕はドガに感心した。

そう云って私は感激の余り震えそうになりながら、一生懸命に本をめくった。そして裸婦が
た
らいのようなものの中で足を洗っているらしい格好をしている図のドガのデッサンを父の前
に

つきつけて

-僕も今にこんなに描けるようになるんだ!

と叫んだ。父は、次の帰宅の時にミケランジェロの本を持って来てくれた。私の記憶する限
り

では、父が私の学業に就いて云々した覚えはまるでない。私の中にある何物が高原の花のよ
う

に咲き開いて行くのをじっと眺めている、と云ったような印象があった。

-数学や理科にもっと力を入れなくちゃあ…。

と中学生になった頃、母がこぼすことが度々あった。

-基礎をしっかりと置かないと、高校へ入ってからついて行けなくなりますよ。

私には、その頃あたりから高校の勉強について行く気持ちは殆んど失いかけていた。将来絵
描

きになろうと考えていたのではない。自分である、という事態を最大限に発揮した存在にな
り

たいと漠然と考えていた。先ず、素晴らしい眼と、手の持ち主でありたかった。それから、野獣のように逞ましい肉体の持ち主でもありたかった。進学担当の教師から与えられた問答式の

紙切れの「将来の希望」という欄には
-ルネッサンス的人間像。

と正直に堂々と書いたものだった。

23

教師を馬鹿にしている、という定評があった私だったから、その教師は惧らく、いたずらの一

種だと思ったのに相違ない。

-進学というのは将来に影響する大事なことから、少しは真剣になってはどうか。

と忠告してくれた。私は至って真剣だったのだ。スミス神父の話を聞いて、ミッション・スクールへ入ることに決定した。父は

-そうかい。

と云って、にっこりと肯定しただけだった。

-そんな所へ入ったって…。

と母はいくらか恥しげに云ったものだった。高校にさえ合格出来ない馬鹿共が行くところだ、という通念があったからだ。

-秀才業は次郎かさやかに譲ることにしたよ。

と私は母を慰めた。

-この子は完全に貴方の実験コースね。

と母は父をなじることがあった。

-まあいいさ。私にとってはこの子の将来が一番楽しみだ。

というのがいつもの父の返答だった。

-何だか実験から出た途端に社会に適応出来なくなるのではないかと心配だわ。

それでも私は道内の健康優良児コンテストに優勝して、母の心配をいくらか和らげたこともあ

った。然し、大学進学期が接近すると母の憂慮はさらに強化された様子だった。

-語学力があるのだから外語大学へでも入ったらどう？就職率が素晴らしく良いっていう話

で

すよ。
-何処かの貿易社会にでも納まるってわけ？御免だな。東京へは出たいけど、別段大学へ入

り

たいという気持ちはないよ。

24

誰か素晴らしい人間の弟子にでもなりたいな。

-素晴らしい人間？

母はほとほと呆れ返ったという表情をした。

-まさか…。

-本当だよ。

-一体、どんな人が、その素晴らしい人間なんです？

-徹底的に生きている人間さ。自分に備わった全能力を發揮して徹底的に生きている人間だよ

。

-まさか戦時中じゃあるまいしそんなに一生懸命にならなくても生きて行ける世の中ですよ。ふと、私は、父が隠居中に眼を輝かせて、一心ふらんに生計を立てていた母の姿を思い浮かべ

た。然し、それは一瞬の電光のようなもので、次の瞬間には、穏やかな日常を背景にして、半

端当惑し、半端腹を立てている平凡な中年女の姿の中に消え去っていた。結局は、卒業しても

学士号すら貰えない美術学校へ入ることにした。

-よくよく喰うに困ったら田舎の教員にでもなるさ。学士号なんぞという変な餌がお先にぶら

下がっていないだけ、入るといふ動機に純粹さがあるよ。入らぬという状態に対するささやか

な歌だ。

と、私は経済状態のせいで大学進学を踏みとどまった友人の一人に云ったことがある。

-せっかくの学費の浪費だと、僕は思うね。

と実感を込めてその友人は細々と云った。

3

25

デイヴと長話しをしてから数週間経った。その間、私は、どう考えても、就職という枠内に自

分を嵌め込んでしまう心境になれず、踏ん切りのつかない状況で下宿にとち籠っていた。学

士号を取りたくなかったから。或いは上野に入るかもしれない、という理由を捻出して、家計をま

かなっていた母に向かって仕送りを続行する旨、手紙は出したものの、そんな気持は毛頭無

かった。若しも、資格がどうしても必要だというのなら医者にならなろうと思っていた。然し、そのためにはかなりの資力が必要だ。弟の次郎と、妹のさやかにも学資を送っている両親にと

っては更に以後数年に亘って私のために出費を続けるということは並大ていではない。友人

や

デイヴには気軽に田舎の代用教員になると言っただけのもの、いざ田舎へ行くということ

を考えると物わがりの悪い頑固な田舎者の様相と底知れない退屈さにつつまれた単調な田舎街

ばかりが彷彿した。白樺の高原は、私の父が捏造し上げた飛び地にすぎないのだ。私が美術学校

を志望するという事を耳にしたミッションの図工教師の言葉がちらほらと私の胸中を行き

か

った。

—漫画家にでもなればいい。

私の中に、芸術的土壌が見当らないということをも端的に言い表した言い方だった。

—お前には何も教えることはないよ。図工をとるとするのは時間の無駄だ。

と褒めてくれたが、私にとっては、図工科ほどもってこいの時間つぶしの場所は他になかった

。考えように依っては美術学校へ入ろうとした動機の最大誘因も、この時間つぶしということ

にあったのかもしれない。どうせどこかで時間つぶしをしなければならないのなら、学業か

ら解放された折角の私のための時間をその拘束物のために不当に費す理由は無かった。美術

に
関する限りではそれこそ小指を動かすほどの努力を払いさえすればうまうまと関門を切り抜け

得るという確信があったし、又事実、その通りだった。

—漫画家にでもなろうか…。

と考えていた時だった。早朝八時になるかならぬかというのに、私の部屋の障子が見事に開

いて、デイヴが突入して来た。肩で呼息をしながら

—一体全体、どういうわけで、日本人というのには電話をつける習慣が無いのかね!

—ちょっと叫べば向こう三軒両隣りに通じるという地理的利点のせいさ。そんなものは贅沢

の
一種だ。一体何が起ったんだい?

—まあ、ともかく聞いてくれ。

と、彼は、まだ布団の中に居た私の隣に座り込んだ。

—僕はこれでも君をある程度知っているつもりだ。そうだろう?

—まあね。

—君が現在進退極まっていると仮定するだけの証拠を握っている。そうだろう?

—まあね。

—君には確かに偉才があると推測しても間違いではない。そうだろう?

—どうかね。

27

—オー・ノー、それなら仮りにこの僕にその君を救い出すという手段があるとしたら、それを実行に移す、というのは君の人権侵害になるかどうかだ。どうだい?

—事態の内容によりけりだ。

彼は暫く、まじまじと私の顔を見ていたが

—アメリカはどうだい?

と飛躍した。

—アメリカは嫌いだね。殊にニューヨークはこのとこと年がら年中芸術祭りで浮かれている

み

たいじゃないか……。セントラル・パークにもたいして興味は湧かないよ。

デイヴはがっくりと来たかのように肩を落した。黒い丸い眼の中から光が失せて行くのがある

ありと見えた。

-ああ仕方のない奴だ。

そう云って、私の傍の畳の上にゴロリと寝そべり、腕を組んで、天井を睨んでいた。

-アメリカ遊学可能なだけの金があったらフランスへでも行くさ。せいぜいおふくろさんを喜

ばせるためにだけでもね。彼女の世代の人間は、まだ、パリは芸術の首都だと信じ込んでいる

。帰省してきたときに箔が付くんだ。ノートルダムでも繰り返し描いて置れば結構金にもなる

し、有名人にもなる。セントラル・パークじゃ、どこのセントラル・パークやら見当もつかぬだろう。おまけに、どこかの成金が、買って来た土産物かと勘違いされるといふ惧れもある。

-待て待て。日本的な感覚から云うと失礼になるかも知れないが……。

とデイヴは又自信を取り戻したという調子で活気づきながら身体を起した。そして、どう切り

出したものかと躊躇している様子だった。

-そんなことは心配するなよ。その上、

28

君の日本的な感覚に対する敬意は時たま度を越すことがある……。

-じゃあ、思い切って云ってしまうが、実は、その金のことだよ。君のためのパトロンを見つ

けたんだ。実はここ暫らくニューヨークのおふくろと君のことで連絡をつけていたんだ。最初

はどうという目的も無かったんだがね、実際……。おふくろあての日本の学校の卒業式の光景を書いたついでに君のことにも触れたんだ。すると彼女、俄然興味を持ち出してね。近代

版の北斎かとも思っただらいいよ。すぐに、彼女の友人で最近未亡人になった金持の画集家と

話をつけた。全く、この点はユダヤ人的だと思うけどね。……ともかく、その女は君に投資する気持になったらしい。そこで、僕は君が僕をスケッチしたやつを三枚ほど送ってやったん

だ。すぐに決着したね。写実の基礎が出来ていない者は大物にはならないというのがその女の

持論なんだそうだ。勿も、彼女自身が集めているというのは二、三流程度の印象派ものに過ぎ

ないけどね。まあ、それはどうでも良い。君がその次元から自分で開拓すれば良いのだからね

。ともかく、向うの旅費持ちで、最低六ヶ月間、訪問してみないか、という話なんだ。

デイヴは自分の言葉に興奮しているといった格好だった。

-ニューヨーク市郊外のロングアイランドだ。高級住宅地帯だぜ。君が日本人的な顧慮から

恩

に着ては困るというので、一日一回くらいの割合で、犬を散歩に連れ出してくれということに

なっている。干渉は一切しないから勝手気儘に過ごせば良いということだ！まさに芸術家の天

国ではないか！

まさにそのとうりだった。そこから何が展開するかは行ってみなくば解らない。

-有難いな、デイヴ。

と、その夜、感激がひと通り醒めてから、付近のバーで

29

彼と祝杯を交わしながら私は云った。

-お陰様で、漫画を書かなくても済むよ。

-？

-僕はここ暫らく、生計を立てる道を考えていたところだったんだ。田舎教師というのは率直

のところどう考えても意味がない。その上、田舎の人間には、糞尿で畑を肥やすという特技が

ある。僕の出る幕ではないよ。

私の出国準備はとんとん拍子に運んだ。アメリカ側の保証人の一人として、ミセス・サリヴァンというその未亡人は、ニューヨーク市内にある美術館の監督員まで掲げて来た。

-仰々しい受入れ体勢だな。僕のような自堕落の青二才が到着するとは夢にも思わないだろう

。

-おい、おい。

とデイヴが云った。

-君が出発に当って一言だけ忠言して置くが、向うへ到着したら、絶対にその自己卑下だけは

やらない方がいいぜ。謙遜の美德などに構って居られるほど、のんびりした場所ではないんだ

。

-謙遜でもない。実感だ。

-そんなわけなら、黙っているか、はっぱをふくかすれば良い。君の技術だけで辺りを圧倒さ

せるということくらいは僕は承知だからね。

-まるでサーカスだな。アクロバットを見せに行くのか。

いくら向うで金を出すからと云っても、できるだけこちら側からの出費を食い止めていること

によって真摯さを表明しようという下心

30

が手伝い、価格規制の無かったその頃では、かなり安めのイギリス機に乗ることにした。空港

へはデイヴや武蔵野の仲間達の外に故郷からわざわざ出て来た母が、既に東京で勤学中の妹と

つれそってかけつけて来た。父は、夏期休暇前の教育会議が長引いているために身動きが取れ

ないのだという話だった。前日こちらから電話をかけると、

—お前なら大丈夫だ。父は期待しているよ。

と云った。父は常に期待していた。私は父の教育的信念の創造物だったのだ。

—身体に気をつけてね。食事をちゃんとするのですよ。それから何でも良いから困ったことが

あったらすぐに知らせてね…それから…

と母は云ってども云ってどもありきたりの餞別しか自分の口から出て来ないのに焦っているよ

うな感じだった。そして、遂に涙をこらへながら懸命に云った。

—それからね、他人様のことも考えるのですよ。世の中は荒れ野ではないのですからね。強く

なるよりは優しくなって…。

私は母が泣き出すのではないかと心配になって来た。

—大丈夫だよ、母さん。たった六ヶ月そこそこなんだから…。

と私は云った。暫らくしてからデイヴが近づいて来た。

—親子の離別場面を乱したくなかったんだ。

と云った。改札時間が既に始まっており、私達のまわりでは人々が動き始めていた。

—おふくろは一寸泣いた方がいいんだよ。何しろ、全親族をひっくるめて、日本から逃出して

行くのはこの僕が最初なんだからね。

—逃出か…。

31

と云って、デイヴは例の黒い丸い眼で私をまじまじと見つめた。

—僕が日本へ来る時に、知人が僕に向かってこう云ったよ。「ここからでるのではなくて、そこ

へ行きつくことが肝心だ」とね。この同じ言葉を君のための花むけにするよ。…外に何と

云ってよいのか解らない。或いは向うで君に会うということになるかもしれない。グッド・ラック。僕のおふくろによく伝えてくれたたまえ。

夜の空港を他の乗客に並んで飛行機に向かって歩いていると、突然、暗闇の中から

—一郎、頑張れ!

という合斉が聞こえて来た。振り返ってみたが、煌々と照りつけている照明灯の背後は、ただ

真っ暗闇で何も眼にすることは出来なかった。その黒色に向って手を握ると、今度は微かな細

い声だけが返って来た。何を云っているのか聞きとれなかったが、その切れ切れの抑揚から察

して、多分は

—気を付けてねえ…。

と母が叫んでいるのだ、と思った。或いは妹なのかもしれない。

③一九六一年六月 JUNE 1961

④親愛なるダイヴよ。

とニューヨーク到着後、二・三週間経っていた。

—現在、僕を取り巻いている物体どもを描写して、武蔵野の連中に書き送ったなら、惧らく、僕は開校切つての成金になったか、と思われるに相違ない。現に、ここで、こうして君宛の手

紙を書いているこの机は、ミセス・オリヴァンに云わせると「由緒のないつまらないもの」で他の部屋にある純血のヴィトリア式家具とは比較にならないのだそうだが、何れにせよ、僕の

眼には、武蔵野の学長部屋

32

の学長専用机の数倍は見栄えのする代物に映る。ああ、あの机の前に、僕は何度立たされて、何度、あの老人訓辞を聞かされたことか！ 終いには、僕の脳裏では、老人と机が完全に融合し

て一体となり、机のない老人、或いは老人の無い机というものが考えられなくなってしまった

ほどだ！ 僕は、最初に到着した日に、僕には机に向かって何かをするという習慣が無いのだか

らこんな立派な机は僕の部屋には不用だとミセス・サリヴァンに云ったのだが、家具との調和上、他の部屋に置けないというわけでまだここにある。ともあれ机から話が始まって、最近

は、彼女のアンティーク講話をよく聞かされている。アメリカは伝統が浅いから、それだけに蔵

物に対する執着心が強いとは大分前から聞いては居たが、まさかこれほどだとは想像もしてい

なかったよ。前にも書いたように、ミセス・サリヴァンはなかなか気の好い人物だ。勿も時折、伴侶が居ないせいでフラストレーションを起こしているのではないかと気になることもある

がね。彼女はまだ、いまに僕が絵を描き出すものだと信じていて、時々、何気ないふうを装っ

て、何時、隣の空部屋を片付けたらよいのかなんぞと訊いたりする。その部屋は彼女の娘が

使っていたのだそうだ。何とかという南部出身の変わり者と結婚して南のマーシャル諸島の

一ヶに住んでいるのだそうだ。二人ともピース・コウに所属している。ミセスは娘の成り行きに対しては少からずお冠の様子だが、写真で見た限りでは、わざわざ南の孤島まで出かけてもし

なければ結婚相手が見つからないのではないかと想像出来るほどのひどい御面相の娘だ。つ

いながら、僕は未だに、啞然とするほどの美女には

33

お目にかかっていない。勿も、この界限で見かける生き物といえば、老人と犬ばかりのよう

気がするときもあるがね。最近はむく鳥がやたらと増えて来た。明け方早々にうるさく鳴き始める。ミセスの話に依ると家のまわりに生えている南部産の杉の木のせいだという。フロリダへ南下する途中でその杉の木に巣を作って、ここで夏を過ごして行くのだそうだ。「南部産のものどもに殺されたどうしだ」と云ってこぼしていた。君には興味の無いことばかり書き連ねたが、どういうわけか、彼女の話を知っているうちに、僕はその娘の伴侶という存在に好奇心が出て来たんだ。彼女自身まだ一度も会ったことがないのだそうだが、娘からの手紙に依ると、一寸異様な人物らしい。僕は南北戦争のことを思って、いくらか打ちひしがれた高貴な人間の姿を想像している。スナップ写真でみただけでは金髪のハンサムな男だということしか解らない。七月の初めに帰省するとのことだからその時、僕の眼を通して見た彼のことに就いて書き送るよ。何だか、もの取り憑かれた魂独自の熱病的なものがその男にあるような気がするんだ…。どうしてそんなものに惹かれるのか、自分でもよく解らないけどね。美術館はひととおり廻った。印刷物を通してすっかり馴染んでいたもの等の、その実物にお目にかかるということは、矢張り感無量だ。親爺に見せたい、とふと考えたね。彼のほうが、僕よりは感動するのではないかと思う。僕のモダン・アートに対する見解のほどは君もよく承知だから言わない。

34

MOMのモネーの水連の部屋で、ミセスが感激の余り地べたに座り込みかけたのにはへこたれたことを一筆しておくよ。来週頃、僕の保証人になってくれた美術館勤めの某氏に会いに行く予定だ。ミセスは、同年者と知り合うだけで良いから、アートスチューデントズ・リーグに入れと提案しているのだが、その気になれない。芸術には少々食傷気味だが。この調子だと六ヶ月後にはもとの黙阿弥で帰還するかもしれない。ではそれまで。一郎。

-一九六一年五月

親愛なる一郎

手紙ありがとう。実のところ、もっと景気の良い情報を当てにしていたのだが…。然し、考えてみると、君はまだ到着したてだ。六ヶ月が満了するまでにはかなりある。ミセス・サリヴァンの屋敷に引っ込んで彼女とむく鳥との啼き声ばかり聞いて居ずにちよくちよくマンハッ

タンへ出かけてはどうかね。インターナショナル・センターとか、日本人クラブとかがある筈だよ。僕が知っているのだけで二、三はある。住所を書いて置くから物はためしに行ってみる

といい。それから、国連の付近に雰囲気の良い日本レストランがある。「シマ」という名称だ

。是非、行ってみるといい。ミセスでも、同行して…。良い娘が君の周囲に居ないというのは残念だ。僕が知っている娘達を紹介して置くから、その気になったら電話でもかけてみる

とどうかね。然し、これは、僕自身が経験したことだが、外国人と日本人とでは、人間に対す

る限

35

りでは、その美的判断にいくらか差があるのではないかと思うよ。例えば、永劫の悪とばかり

思っていた僕のこのデカイ鼻が、日本へ来て以来賞賛の的と化してしまったことなどね。それ

に、浮世絵の美女を見てみたまえ！いくら時代のずれがあるとしても、この女性が、一般の

アメリカ人に美女と映り得ることはまああり得ないだろう。白状すると、この僕も日本的な美的

判断を体得するまでにはかなり時間がかかった。それで思いついたのだが、例えば君の妹は、まだ僕の中に残存しているアメリカ的感觉からすれば非常に美しいと云える。君の妹だ、と

いう特殊状況がなかったとしたなら、一寸、光々しくて近寄れなかつただろうね。これはまあ、大袈裟な云い方だとしても、僕には彼女が素晴らしい美女に見える。然し、どうやら、彼女

自身は自分の美しさに気が付いていない様子だ。それとも、君に似て、自己卑下の大家なのかも

もしれないね。空港で会って以来、ちょくちょく喫茶店などへ出かけている。英語はまだ君ほど

ではないが、結構話は通じているよ。頭脳の方も非常に明晰だ。どういうわけで、バレエなど

という魂の糧にならないものを勉強しているのかは知らないが一。勿も僕のおふくろなどに

わせれば、芸術の一種なんだそうだがね。とにかく、そういうわけだから、君は自分では知ら

ぬ間にアメリカ的美女にわんさと会っているかもしれないぜ。ミセス・サリヴァンの娘にしても或いはそういう美女達の一員なのかもしれない。七月の情報を楽しみにしているよ。但し、その手紙の宛先は君自身の家

36

にしてくれたまえ。驚くなかれ！君の妹とおふくろさんに夏を北海道で過ごすようにと招待さ

れているんだ！最大のニュースを文末に書くという欧米の習慣に習って、少々むずむずして
い
たが、遂に披露するよ。僕の最高の夏だ！多分こちらからは、どっさり手紙が行くだろうよ。
北海道に就いて何か僕に必要な知識があったら書いてくれたまえ。例えば君の親爺はどんな
人
なのかね？妹さんの話に依ると典型的に日本人のイメージからは少々はずれているらしいが
…。然し、そういう点では、君も、君の妹もその範疇に当て嵌まるからね。
食傷気味の君に向って、芸術を云々するのは意味がないかもしれないが、僕は実は君がゲル
ニ
カに全く触れていないのに一寸遺憾だった。全く無感動だったのかい？聞かせてほしい。あれ
は、ニューヨーク市最大の蔵物だと僕は考えるのだがね。何かこちらから送ってやれるもの
が
あったら遠慮なく云ってくれ。身体とその君の机を大事にしてくれたまえ。では又。デイヴ。
別紙には、十数ヶにのぼるアドレスが几帳面な字体で書き並べてあった。クラブや団体には
関
心は無かったが、私は、六段ほど並んでいる女の子の名前を目で追った。リサ、という名が私
私
を捕えた。遥かに遠い記憶の中から黒髪の高い小柄の少女が私の脳裏に浮かび上った。
37
貿易関係の仕事で駐在していたアメリカ人の娘だった。そういう家族のためのアメリカン・ス
クールが同じ市内にはあったのだが、両親が熱心なカトリック信者だったせいで私たちのミ
ッ
ションへ転入して来ていた。私の英語が他の皆よりは達者だったせいもあり、彼女は特別な
親
近感を見せて、私に近寄って来たものだった。週末になると殆んど必ず食事に招待してくれ
た
。量・質ともにありきたりの貧相な家の食物に比べると、この眼新しいアメリカ料理は、私に
とって正に神の美食といったところだった。
一男の子のくせにずいぶん料理に関心があるのねえ。多分良いハズバンドになるわ。
と、リサにいくらか似た小肥りの母親が云った。実のところ、私は彼女から伝授して貰った
料
理法を細々と母に向かって書き送っていたのだった。その頃は別段山麓の僻地に居なくても
西
洋料理はかなり珍しい方だった。
一おい、お前。彼女に気があるんじゃないのか？
と同室の友人が好奇心と懸念がごちなく混ざった表情で訊いた。
一だとしたらどうなんだい？
一どうっていいこともないさ。ただ…ただ…あいつは外国人だぜ。
一だからどうだっていうんだい？女は女だぜ。
一だから危いんだよ。奴等はすぐにベッティングだ何だと云って
38
えげつないことを始めるという話だぜ。

一僕の童貞でも心配してくれているのかい？

童貞という言葉聞いて友人は顔を赤らめた。まだ何となく小便臭さが残っている蒼い首筋をした小柄の少年だった。

彼が案じた通うりに私はそれから間もなくその童貞を失った。リサに依ってではない。彼女の

友人のアメリカン・スクールに通っている金髪のが、その相手だった。黄色い巻毛がカーテンを閉じた薄暗い彼女の部屋の中で私の顔にまつわりついた。白樺の高原に咲く月見草のよう

な微妙な慣れない臭気があった。

一今夜この娘に電話をしてみよう。

私は、リサ・シェーファーと書いてあるダイヴの筆跡を眺めながら考えていた。

日本からやって来たダイヴの友達だと云うと、受話器の向こう側の声は、直ちに親近感を増し

て一気にしゃべりだした。是非とも会いたい、ということだった。彼がなかなかの信頼感を集

めていたらしいということはほぼ明瞭だった。国連の近くの「シマ」という日本レストランの

名をあげると、すぐに相手に通じた。

一ダイヴと行ったことがあるのよ。

と彼女は云った。翌日彼女に話して置いた通りの服装をして、そのレストランの中のバーに座

っていると、向うでも云っていたとうりに、茶色のベレー帽を被り、何色調の軽いトレンチコ

ートを着た彼女が約束の時間きっかりに入って来た。鼻が大きく、暗い茶色のこれも非常に大

きく見開いた眼をしていた。美人なのかもしれないと私は

39

あやふやな美的判断をした。全体的に、どこか白人臭くない異人種的な相貌をしていた。ベレ

ーに半分かくれた額は妙に狭く、そのまわりに、うぶ毛らしいものが密生して居り、それが、何か野生の動物めいた感じで、濃い茶色の巻髪と混ざり合っていた。

一イスラエル人なのよ。

と、一通り、ダイヴの状況を話し終って一段落したところで彼女が云った。

一わたしの英語にアクセントがあるでしょう？でも、貴方は日本人にしては流暢な英語を話す

のね。何処で習ったの？

一カトリック系の学校へ行っていたのですよ。

と私は答えた。ミセス・サリヴァンの友人達のようにミッション・スクールだと聞いて植民地に似せぬとも限らない奇態な光景を想像されては困ると思ったからだった。

一貴方はカソリック信者？

一勿論そうじゃありません。

一ゼン？

一え？

一仏教の禅？

一どうして解るのですか？

私の父の家系は禅宗だった。

一デイヴが禅に関心を持っていたことがあったのよ。

一そんなことは奴さんおくびにも出しては居ませんでしたよ。

一本場へ行ってから恥かしくなったのね。多分。この辺の芸術家の卵の間では、一寸した流行

になっているのよ。でも、一体、どういうわけで、禅宗の貴方がカソリック系の学校へ行った

のかしら？ 矛盾しやしない？

40

一僕達日本人には、宗教問題を軽視する傾向があるんですよ。生活の方便に叶うものなら何でも

よい。無神論者でいた方が便利な場合にはそれでもいい。

一貴方自身もそうなの？

一そうですよ。多分、僕にはそうした傾向が他の人間よりももっと強くあるのかもしれない。彼女は当惑したように天ぶらのエビの尾が残っている皿を見下ろしていたが、

一わたしは割と敬虔なユダヤ教信者なのよ。本当ならこうしたコシャー以外の食物は食べては

いけないの。でもニューヨークに住んでいてそんな真似をしているわけにもいかないでしょう

？

と云って、恥かしそうな小さな笑いを作った。

一デイヴのお陰で、色んな旧世界からの拘束を破ることが出来たんだけど…。それが私にとって良いのか悪いのかはだんだん解らなくなって来るみたい…。

彼との関係は、初頭の情熱気を通過した後は、徐々に兄妹的なものに変化して、現在では仲の

良い友達程度だと云う。彼女自身は第七アヴェニューに並んでいる服飾関係の間屋で秘書を勤め

ているが、デイヴと交際していたせいで、芸術家の友達が多い、という話だった。あとの五人

も似たり寄ったりの関係にあるのか？ と私は考えていた。とすると何喰わぬ顔をして居りなが

ら、奴も大した強者だ一。単なる友好関係なら、嫉妬するようなこともあるまいと考えて、私

は残りの名前を彼女に見せた。

一もうブラック・リストを作っているのね！

と彼女は目を丸くした。

41

一ふーむ。そうね。リンダに、サリーに、ジョーアンに、パット…この一人だけ聞き覚え

のない名前だわ。彼女達に会ってみるつもり？

一解りませんね。

一だったら、ジョーアンに会ってみたらどうかしら。そう、いいことがあるわ。今週の土曜に

彼女のところでパーティがあるの。顔出してみないこと？わたしのほうから彼女に貴方とデ

イヴのことを云って置くわ。彼女多分貴方につき纏って放れないわよ。何しろ、デイヴにはす

いお熱の上げようだったのだから…。日本へ一緒に行きたかったのよ。でもデイヴのほうで逃げて行ったみたいない感じ…。解るでしょう？

一さあね。

一典型的なジャップ…。

一ジャップ？

一あら、失礼！日本人のジャップってことではないの。ほら、ジュウイッシュ・アメリカン・プリンセスのジャップ。要するに、典型的な我慢娘ってこと。すごいお金持の娘で、何でも自

分の意のままになると思い込んで…。でも、根は人情深くて善良なのよ。友達としては大丈夫だけど恋人だとしたら特にデイヴのような人間にとっては我慢が出来なくなるんだと思

うわ。

一それほど親密な仲だったんですか？

一ジョーアンにとってはそうありたかったんだと思うわ。一寸自惚れているようだけど、デ

イヴが一時的にでも真剣だったのは、わたしだけだったんじゃないかしら…。彼氏は、いわゆる女好きの方ではないみたい。勿も、サリーに一時はうつつを抜かしているような様子だ

った

42

けど、肝心のサリーのほうでは、とうとう彼を頼りになる兄ぐらいにしか感ずることが出来な

かったのね。すらりと背が高く、とても素晴らしい美人なんだけど。…これは内緒にして置くべきかもしれないけれど、彼女にはレズビアンだという風評があるのよ。貴方も彼女の

恋の虜にならないうちに忠告して置くわ。誰でも一度は彼女に惹かれるみたい。ほら、この

パットが彼女の御親友…。

そう云って、リサは妙な眼付をしてにやりとした。

一みんな、ジョーアンのパーティへ集まる予定なの。是非いらっしゃいね。

別れ際にリサはポケットから骨ばった細い手を出して握手を求めた。頼りの無さそうな弱い指

だった。そして、くるりと踵を返すと両手をポケットにつっ込んで下向き加減に地下鉄のある

方向へ向かって早足に歩き去った。

一最初のデートね、どんな娘？

とミセス・サリヴァンが云った。

一デートというほどのものでもありませんよ。デイヴの友達だということで興味があっただけで

す。額と眼のあたりがお嬢さんに似ている娘でしたよ。勿もお嬢さんの方は写真だけではよく

解りませんがね。イスラエル人だそうです。

一それじゃ綺麗な娘ね。

と彼女は云った。矢張り私の美的判断には誤りがあったのだ。

一こちらの人間は高い鼻を嫌うそうですが本当ですか？

と私は訊ねた。ミセス自身が巨大な鼻の持主だったので